建造物

京都民芸資料館の建築における陶芸家・上田恒次の設計作業について

石川　祐一

1　はじめに

「京都民芸資料館」（京都を彩る建物や庭園：選定）は、京都市左京区岩倉木野町に所在する民芸資料の展示施設である。滋賀県日野町の土蔵を移築し、陶芸家・上田恒次（1914～1988）の設計により、改修・増築を施して、昭和56年（1981）に開館している。

京都は民藝運動の揺籃と発展において重要な地と言えるが、京都民芸資料館の開設に直接関係する経緯に限って経緯を概略すると以下のようになる。昭和４年（1929）、日本民藝美術館主催「日本民藝品展覧会」が京都大毎会館で開催されたことを契機として、「京都民藝同好会」が結成された[1)]。昭和21年（1946）には、同会を基盤として京都民藝協会が結成されている。東京の日本民藝館に追随して、倉敷民藝館（昭和23年（1948）開館）、鳥取民藝館（昭和24年（1949））などを早い時期の事例として、全国で民藝館が開設された。京都民藝協会においても、京都独自の民藝館の設立が希求されるようになったが、その実現は昭和56年まで待つこととなる[2)]。

これまでの調査の結果、上田恒次家などに京都民芸資料館の設計資料が保存されていることを確認することができ、それらには実現案に至る過程で模索された原設計案も含まれていることが分かった。本稿では設計資料などを基に、京都民芸資料館の設計案の模索の過程を考察する。

また、上田恒次は陶芸家でありながら約30棟ほどの建築作品を設計しているとされるが、京都民芸資料館はその晩年の建築作品である[3)]。同作品においてなされた作業について報告することで、陶芸家である上田の設計手法やスキルの到達地点を確認する材料を提供したい。

2　設計案の模索

（1）金閣寺周辺を想定した設計案

昭和39年（1964）頃、鞍馬寺歓喜院で京都民藝協会の総会があった際、上田恒次が自身の民藝館の設計案を披露したという[4)]。その後、建設好適地を探すために昭和49年（1974）、「京都民芸館建設促進委員会」が発足した[5)]。会の発足後、金閣寺周辺などに設立しようとする案もあったとされるが、結局、土地の確保にまで至らず頓挫している[6)]。

上田恒次家に残る資料には、敷地を金閣寺付近に想定した案が残されている。図１、図２には、長屋門と土蔵風の建物が描

かれている。図１は長屋門の背面側から土蔵風建物の正面を描いたもので、２枚は同一の設計案であると推測される。図２の裏面には「京都民芸館　五十年度　金閣寺案」の記載がある（以下、図１、図２を「金閣寺案」と称する）。長屋門は真壁造で腰部分を鎧下見板張、基礎部分には自然石のような表現がなされる。外観には出格子や無双窓らしき窓が見られる。土蔵は基礎を自然石、１階部分に矩形の表現がある。これは上田の他作品に見られる陶板張りの仕上げと推察される。

図１　金閣寺案

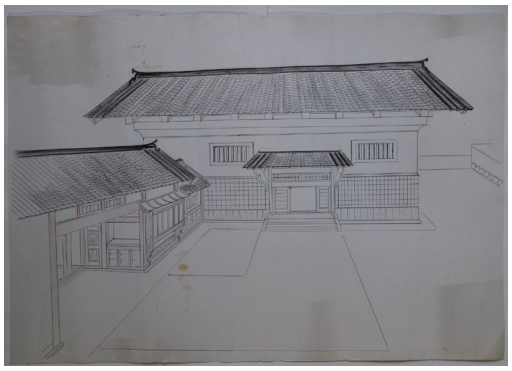

図２　金閣寺案

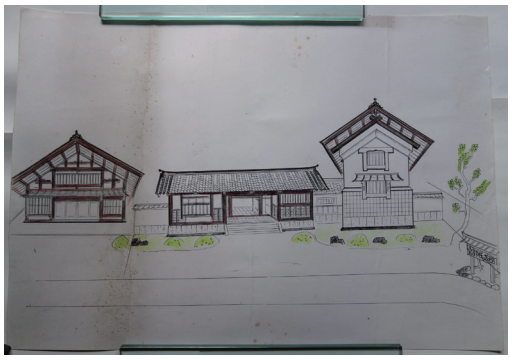

図３　敷地不詳案

一方、図３では土蔵風建物の外観は同一であるものの、長屋門の向かって右側に位置している。長屋門の左手には真壁造の２階建、妻入形式の建物が、妻面を正面に見せて描かれている。この建物は上田設計による「保田與重郎邸」（昭和33年）や抱楽亭（昭和54年頃）に類似した外観意匠である[7]。同図面（図３）には題記がなく金閣寺案の別案なのか否か不明だが、敷地間口はより広く岩倉の現在地とは異なる敷地を想定した案と言える（以下「敷地不詳案」と呼称する）。

いずれの案も土蔵風建物を収蔵機能などに想定したものと考えられる。土蔵風建物は、後の民芸資料館の原案や実施案と同様に、置き屋根式で、妻面を正面に向けて、破風板などの木部に朱色のベンガラを塗る外観である。また、長屋門や住宅風の２階建建物も、上田の他作品に繰り返し採用された、赤茶のベンガラ色と白い漆喰壁のコントラストを強調した意匠とする。

「金閣寺案」は「昭和50年度」の年紀から「京都民芸館建設促進委員会」が検討していた敷地を想定した設計案と考えられる。一時、金閣寺周辺などに予定地を物色していたことがあるとの聞取りとも一致している[8]。

（２）京都民芸資料館の原設計案

敷地の入手に頓挫する経験を経て民藝館建設の困難さを感じた上田は、まず収蔵庫を建設することが必要であるという考えに

傾斜していった[9]。上田は昭和54年（1979）７月に、自邸周辺の所有地を提供して収蔵庫を建設する案を促進委員会に提案した。上田は同年春に滋賀県日野町に残る土蔵を提供してもよいという申し出を知り、ほどなく現地を視察している[10]。この土蔵の移築が、収蔵庫案の選択肢の一つとなったと考えられる。

この上田の提案を受けて促進委員会は解消し、収蔵庫建設案を進めるために「京都民芸館建設準備委員会」が設立された[11]。

上田家には、「京都民藝館」と題された設計案が保存されている。「A案　京都民藝館収蔵庫姿図」（図４）、「C案」（図５）の二つがあり、いずれも年紀はない。（資料中にB案は確認できない）。

A案は地階部分がピロティーとなり、妻面の１階部分にはむしこ風の窓を設け、外壁には黄色の正方形の陶板（あるいはタイル）を貼っている。入口の面は不明である。正面に窓を配する妻面を向けて１階部分に陶板を貼る外観は「金閣寺案」の収蔵庫部分と同じ形式である。ただし、敷地間口の幅や建物前面に塀と門を設ける構成は現在の京都民藝資料館に類似する。

C案も土蔵の外観で、石垣の上に建ち、１階妻面に観音扉を嵌めた入口を設ける。単色図面のため不詳であるが、A案と同様に１階外壁には正方形の陶板らしきものが貼られている。入口扉の意匠やその２階部分に設けられた窓は、実現した京都民芸資料館と極めて類似している。このため、C案は既に現地を検分していた土蔵の移築を想定したものであると推測される。

図中の建物の前方に市道（「市道路」）が通り、左手には駐車場（「駐車広場」）が確保されている。その奥には階段と長屋門が見えるが、これは上田恒次邸の構えに酷似していることから、上田邸の南側に敷地を想定している可能性が考えられる。

両案とも土蔵（風）建物の妻面を正面に向ける外観意匠であり、「金閣寺案」「敷地不詳案」の２案とも共通している。上田の土蔵の外観意匠についての志向が感じられる。

両図面のものと思われる２種類のキャプ

図４　A案

図５　C案

ションが、剥がれた状態で残る。内容は下記の通りである。

ア）様式　全館鉄筋コンクリート造り

１階　11坪　ピロッテイ　玄関、階段、手洗処

２階　11坪　階段室、集会展示室　約18帖敷

３階　11坪　階段、収蔵庫　約18帖

総延面積　約35坪

敷地　約46坪

予算　約3000萬円

工期　着工后後約１ケ年間

イ）様式　木造土蔵略式仕様

１階　展示室　8.23坪

２階　略式収蔵室約　8.23坪

敷地　約30坪

予算　約1000萬円程度

これらの内容から、アの内容はA案を、イはC案を示すものと考えられる。よってA案は鉄筋コンクリート造、C案は木造（あるいは簡易な土蔵造）によるものである。A案は規模も大きく工法も相違するため、工費を３倍と想定している。敷地面積の違いから別の敷地を想定している可能性があるが、C案が上田恒次邸の南側隣接地であるとすれば、A案もまた現在地を含む周辺の敷地を想定したものと考えられる。

同２案は上田が所有地を提供することにより、自邸周辺に建設が決定した段階のものであると推測され、収蔵庫案を具体化するための設計案であったものと考えられる。

3　京都民芸資料館の建設

（1）土蔵移築による計画への変更

京都民芸資料館は、最終的に先述した土蔵を移築し、増築を施す案で実現することとなった。移築された土蔵は、滋賀県日野町の瀬川元次邸に残る、明治19年（1886）上棟の建物である[12]。

上田は当初、土蔵の移築に消極的であったと記している。それは、土蔵では厚い壁の内部の部材が腐蝕している場合が多いことや、立派な左官細工をそのまま移築することは困難であるという理由からであった。しかし現地を調査した結果、部材の傷みが少なかったことに加えて、何よりも梁などのケヤキ材が素晴らしく、後世に残すべきものと感じられたからであった[13]。

この土蔵は、昭和54年12月に解体され、岩倉での工事は昭和55年６月に着工、同10月に上棟、翌56年４月に竣工し、開館を迎えている（写真１）。工事では移築し

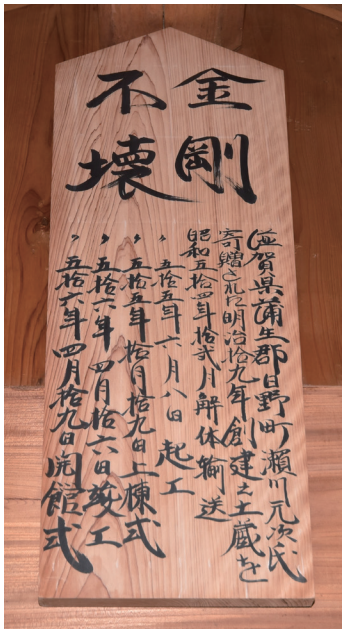

写真１　移築時棟札

た土蔵部分に加えて、半地下階などの増築がなされた。設計は上田恒次の基本設計を基に、株式会社長村組（担当：田中重太郎氏）が実施設計を行い、同社が施工を担当した[14]。なお、建設の過程で館の名称は当初「（京都）民芸館」と仮称されていたが、「京都民芸資料館」に決定した[15]。

さて、最終的に実現した京都民芸資料館の規模は以下の通りである[16]。

敷地面積	155㎡
地階	39.3㎡
１階	36.1㎡
２階	26.9㎡

延床面積で比較すると、A案に及ばないものの比較的近いと言える。一方、C案の規模は日野町より移築した土蔵部分の規模とほぼ一致しており、既に述べたように、C案は土蔵の移築を想定したものと考えられる。

すなわち、収蔵庫建設案として、鉄筋コンクリート造のA案と、移築案であるC案が俎上に上げられ、最終的に土蔵の移築が決定したため、C案を踏襲しつつ、鉄筋コンクリート造で地階部分を加えることによって、A案で想定した延床面積を確保しようとしたのではないかと推測される。上田は土蔵の厳密な移築は困難であると考えていたため、「木造土蔵略式仕様」という表現を用いたとも考えられる。

（２）京都民芸資料館の最終設計案

京都民芸資料館の建物は、移築した土蔵に、半地下階を設け、木造による増築を加える設計である。実施設計を担当した田中重太郎氏の所蔵する資料には、移築前の土蔵の外観写真や実測図面（写真２～５／図６～７）が含まれている。これによれば移築前の土蔵は、梁間２間、桁行３間半の規模を有し、２階建、桟瓦葺である。妻面に入口を設け漆喰仕上げの観音扉を嵌める。窓は、２階の入口上部のみで、漆喰仕上げの観音扉を嵌めている。移築に際しては、南側妻面に窓が設けられた。

また、移築前の屋根は軒廻りを蛇腹仕上げとし、外壁を鼠漆喰仕上げだが、置屋根形式で白漆喰の外壁に変更された（写真６）。また、内部についても、移築前には入口奥の左手面から手前に登る階段であったが、移築時には入口左手の手前から奥に向かって箱階段で上がる形式に変更されてい

写真２　移築前土蔵

写真３　移築前土蔵扉

写真４　移築前土蔵２階窓

写真５　移築前土蔵階段

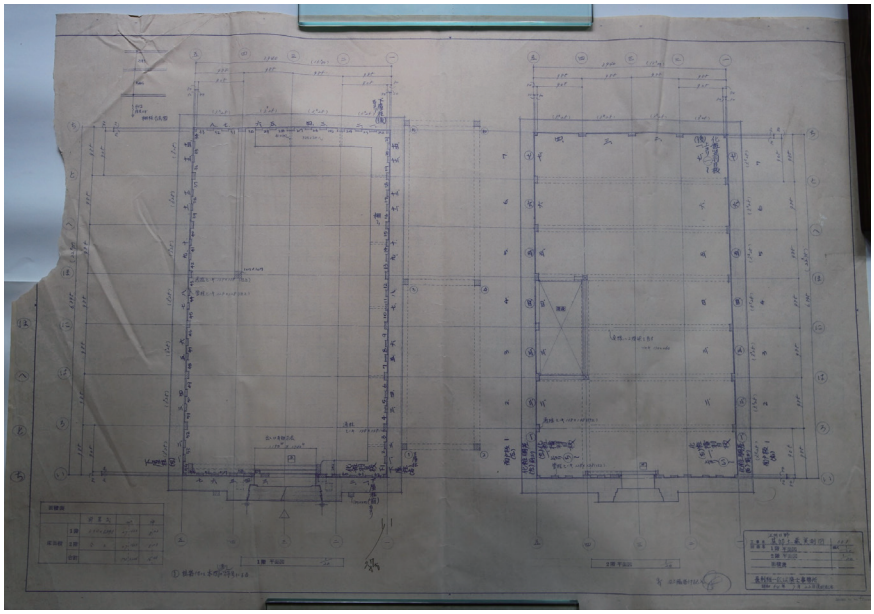

図６　移築前土蔵平面図

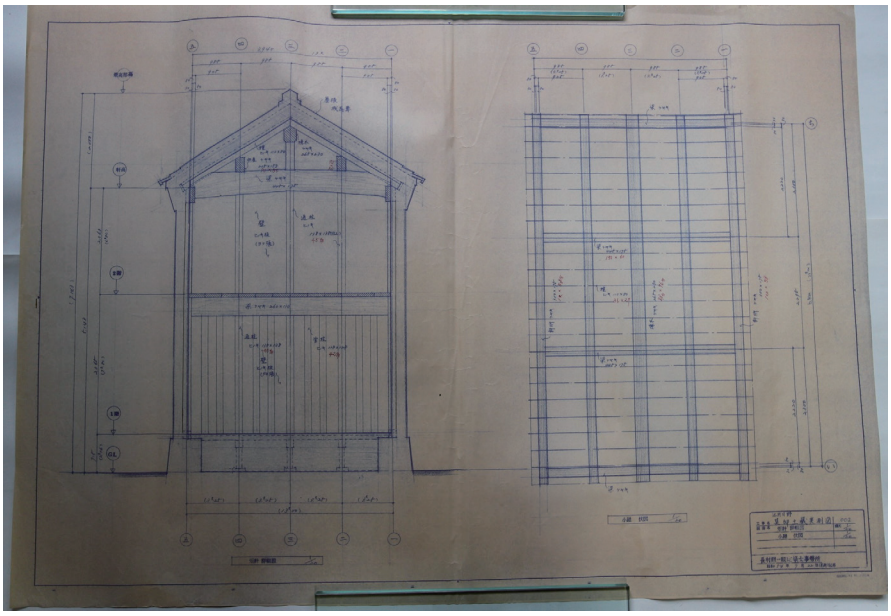

図７　移築前土蔵断面

る（写真７）。１階の奥には半地下階へと降りる階段が取り付く平面となった。

建設敷地には鉄筋コンクリート造の半地下階部分を建設し、その上に解体した土蔵部材を用いて再築している。工事写真からは、小屋組みを中心に新規材料を使用していることが分かる（写真８～10）。土蔵再築の後、東側の増築部分の工事が進められた[17]。増築部分は木部にベンガラ（赤茶色）を塗る、上田邸や松乃鰻寮など周辺の上田作品と共通する外観である。

民芸資料館の内部は、半地下階部分に玄関（写真11）を設け、集会・研修室、１階に展示室（写真７）、事務室（現在は倉庫）、２階に資料収蔵庫（現在は展示室）（写真12）を配している（図８）。移築した土蔵部分を展示・収蔵機能、新築部分を集会・事務の機能に宛てている。

上田恒次の基本設計資料一式が残されており、平面配置図（図９）、断面図、立面図（図10）、陳列ケース図（図11）などが確認される。断面図（図12～16）は室内意

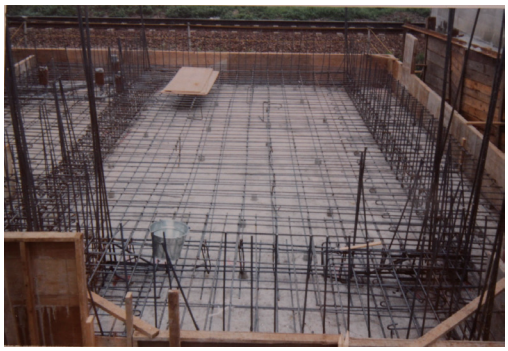

写真８　資料館基礎工事

写真６　現状外観

写真９　資料館工事

写真７　１階展示室

写真10　資料館屋根葺

写真11　半地下階入口

写真12　２階資料収蔵室（現展示室）

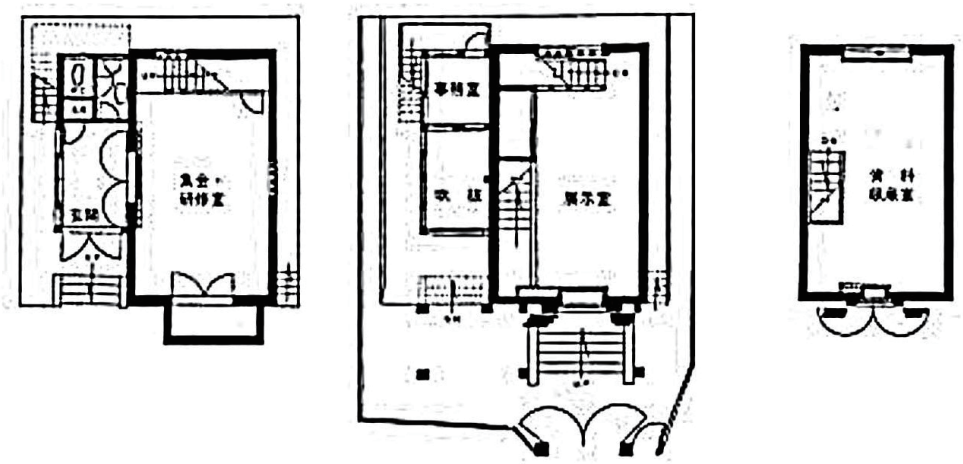

図８　京都民芸資料館平面図

匠を描く展開図も兼ねたもので、縮尺が10分の１のものが見られるなど、極めて詳細な内容である。この他、１階展示室、地階研修室、研修室入口などを描いた「姿図」（図17～21）と称するパース図が残されているのが目にとまる。

これらの図面資料も参照しながら、京都民芸資料館における上田の意匠的な設計意図を検討したい。土蔵部分の外観では、置き屋根形式で２階部分を白漆喰仕上げの外壁に変更している点に、原設計案（金閣寺案、敷地不詳案、Ａ案、Ｃ案）に見られる外観意匠の踏襲が確認される。土蔵内部では機能上の必要性から階段位置を変更するにとどまらず、箱階段を用いるなど、民家風の意匠を志向している。新築部分では、特に半地下階の玄関部分（写真11）に、湾曲した梁材を上部に見せ、和風の木と和紙によるシェードの照明を吊るすなど、他の上田作品に見られる民家風意匠が確認できる。また、新築部分の木部や土蔵の破風板部分にはベンガラが塗られ、白漆喰壁との

コントラストを強調した他の上田作品に共通する表現がなされている。

一方、既に触れたように上田が感銘を受けた美しいケヤキ材の梁を見せる２階収蔵室では移築前の内部意匠が尊重されている。半地下階の玄関部分の入口建具にもケヤキ材を用いており、上田のケヤキ材への志向が見てとれる。

室内の姿図には、展示品を並べた陳列ケースや家具などが描かれ、調度品を含めた空間に対する上田の志向した表現が感じられる。こうした作図は、通常の断面図や

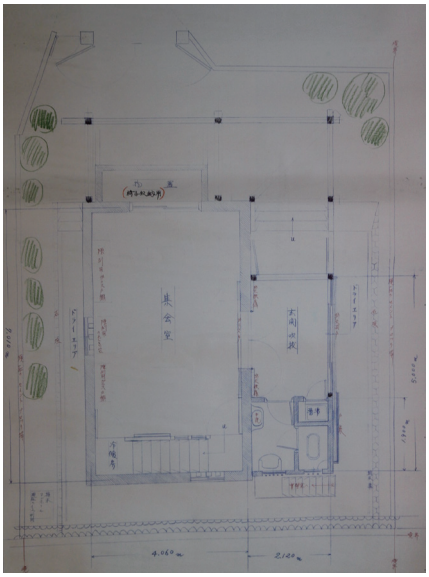

図９　平面配置図

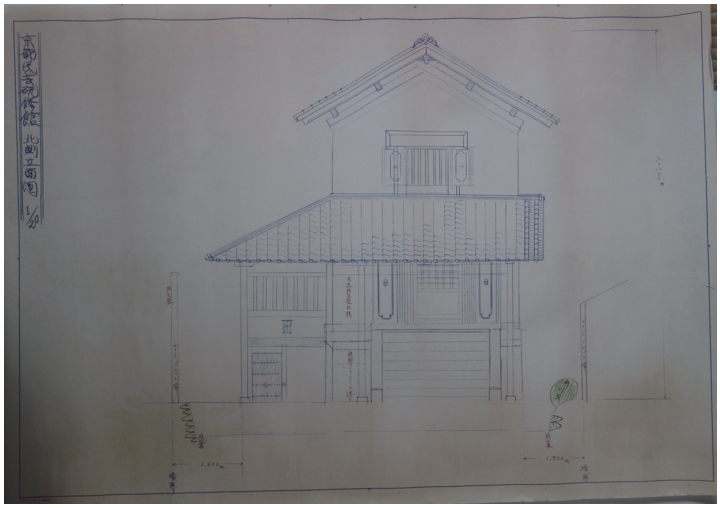

図10　正面立面図

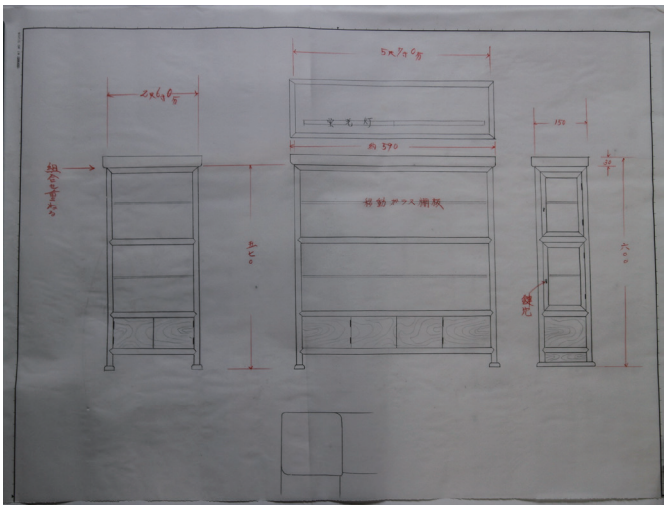

図11　陳列ケース

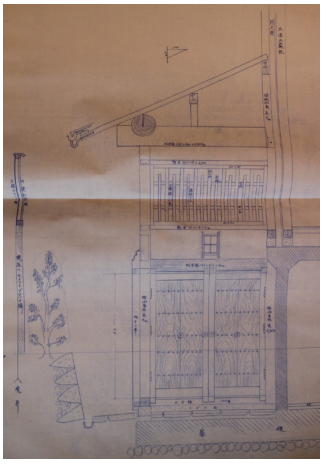

図12　「吹抜玄関断面図」

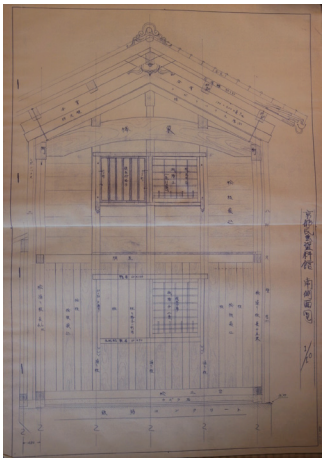

図13　「南側断面図」

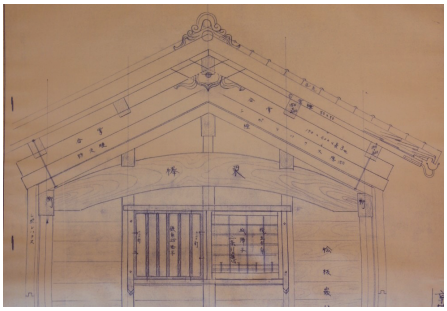

図14　「南側断面図」拡大

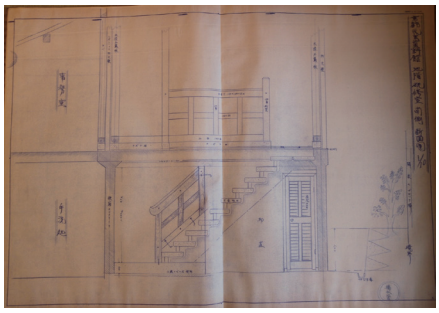

図15　「地階研修室南側断面図」

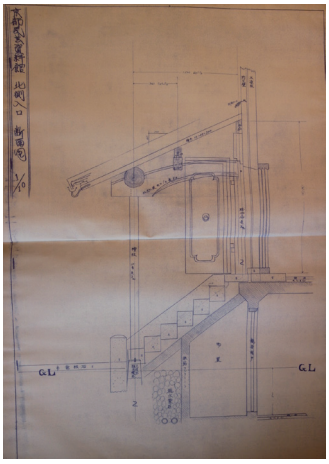

図16　「北側入口断面図」

図17　「地下研修室入口姿図」

図18　外観姿図

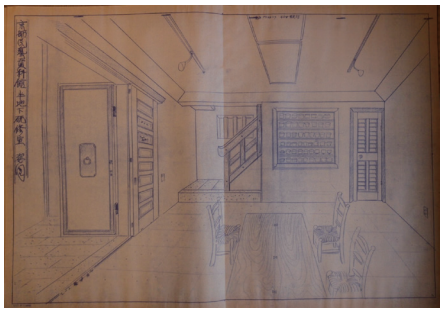

図19　「半地下研修室姿図」

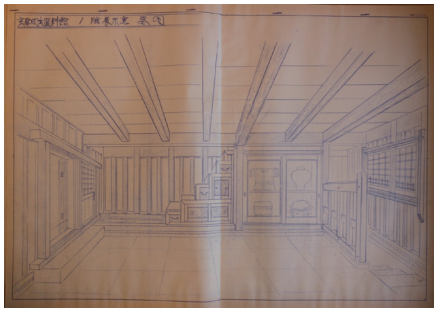

図20　「1階展示室姿図」

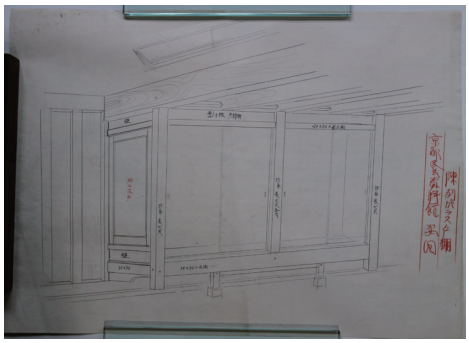

図21　「陳列ガラス戸棚姿図」

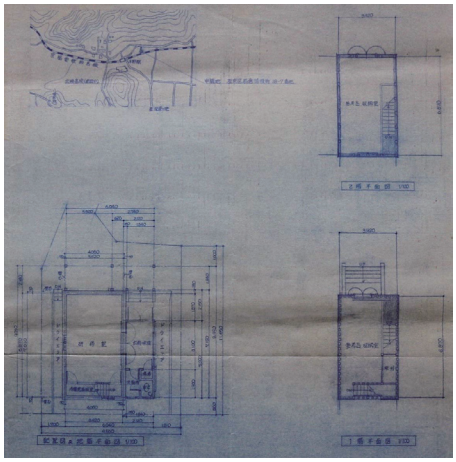

図22　実施設計平面図

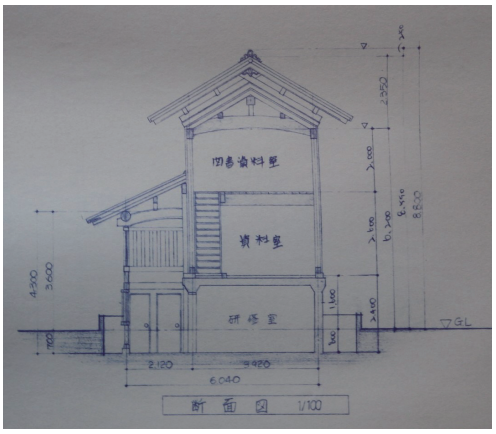

図23　実施設計断面図

立面図のように施工のためだけの数値的な表現にとどまらない意図が感じられ、上田の表現手法の一端が垣間見られるのではなかろうか。加えて、工務店による新規の実施設計図（図22～23）の作成がさほど必要なかった程、上田の図面作成のスキルが高かったことは改めて強調しておきたい。

4　結語：設計手法と京都民芸資料館の位置付け

本稿では上田恒次による設計資料を中心として京都民芸資料館（「京都民藝館」）の原設計から実施案に至る過程を考察してきた。規模の大きな敷地を想定した設計案、おおよそ現在地に確定した時点での設計案、現資料館の基本設計案の各段階における案の変遷を見てきた。

「金閣寺案」などの当初の案では土蔵風建物、長屋門の他、民家風の建物を付随する構想があり、これらの建物によって展示施設、集会施設、収蔵施設を担うことが想定されていた。

その後、現在地周辺に敷地を決定した段階の設計（A案、B案）では、敷地などの制約に合わせて規模は大幅に縮小され、土蔵風建物を核とする案に絞られている。このように、上田の案には一貫して土蔵風の建物が構想されていたと言える。

一方で、上田は土蔵の移築による建築を好んでいなかった。確認されている限り、自邸（昭和12年）を起点とする上田の建築作品の設計活動においては、既存建物の改修事例を除いて、移築や古材の使用による作品を確認することができない[18]。その

言説から確認されるように、上田は古材を用いることに懐疑を抱いており、作品全体を通して部材の歴史性に頓着することはなかったのではないかと推測される。伝統的な意匠を採用しつつも、自らの建築作品を現代建築として意図していたのではないだろうか。とすれば、諸制約に導かれたものではあったが、京都民芸資料館は晩年にして移築という行為と初めて向き合った機会であったと言える。

上田は移築という機会に際して、ケヤキ材の美しさという歴史的建造物の魅力を尊重しつつ、他作品と共通する民家風の意匠を取り入れている。殊に外観意匠においては、ベンガラ色を用いることで、自邸、松乃鰻寮（昭和40・42年）[19] を始めとする自らの作品群が形成する木野地区の景観的な調和を目指す意図が感じられる。

また、京都民芸資料館に関する一連の設計資料からは、既に到達していた上田の設計スキルの高さが確認できる。建築確認に関する設計図書は、主に上田が作成した基本設計図面に、実施設計者による一部図面を加えたものであったという。図面作成の実務に限定しても、上田の初期の作品である自邸や保田與重郎邸の設計資料と比較すると、その作図の表現は各段に洗練されている。

上田による京都民芸資料館の図面類には詳細な断面図が多くみられるが、これらは展開図を兼ねたいわゆる断面展開図に該当する図面である。さらに、「姿図」と称されたパース図面が含まれている。外観についても厳密に水平方向から描いた立面図ではなく、「姿図」として作成している。陳列ケースなどの設計図面も自ら描いたことが確認される。こうした図面類からは、単に施工のツールとしての建築図面ではなく、空間を表現しようとする意図が感じられる。

なお、聞取りによれば、京都民芸資料館の施工中、上田は極めて頻繁に現場に通ったと伝わっている[20]。上田にとって建築の設計とは、轆轤を廻すように、現場でのモノづくりに参加する作業であったのかもしれない。

石川（いしかわ）　祐一（ゆういち）（文化財保護課　主任（建造物担当））

註

1）林弥衛「京都民芸協会誕生当時の回顧」『京都民芸だより』第9号（1979年3月）pp.4-7。杉山享司「我孫子から京都へ～誰と出会い、何を行い、どんなものを蒐めたのか～」杉山享司、土田眞紀、鷺珠江、四釜尚人『柳宗悦と京都　民藝のルーツを訪ねる』（光村推古書院、2018年）p.52。

2）西邨辰三郎「京都民芸資料館」『うつくしい話』（芸艸堂、1985年）pp.230-236。

3）上田恒次「日本人のくらしと建築」『保田與重郎全集別巻3（講談社、1988）p474。上田自身が作成した「上田恒次設計立案　昭和六十一年調査」（上田家所蔵）によれば、24物件が記載されており、これによれば棟数で約30棟を数えるという表現は妥当である。

4）田中重太郎「金剛不壊　京都民芸資料館の建設にたずさわって」『京都民藝だより』第69号（京都民藝協会、2006年11月）pp.3-4。

5）「京都民芸館建設準備委員会誕生（促進委員会の発展的解消）」『京都民芸だより』第11号（1979年9月）pp.3-6。

6）長村組で京都民芸資料館建設の担当であった田中重太郎氏からの聞取りによる。

7）石川祐一「保田與重郎邸身余堂」藤田治彦、川島智生、石川祐一、濱田琢司、猪谷聡『民芸運動と建築』（淡交社、2010）pp.105-110。

8）前掲6）。

9）前掲5）pp.8-9。

10）上田恒次「滋賀県日野町の土蔵」『京都民芸だより』第13号（京都民藝協会、1980年4月）pp.19-20。

11）前掲5）p.3。

12）上田恒次「京都民芸会館（仮称）設立の趣旨（案）」『京都民芸だより』第13号（京都民藝協会、1980年4月）p.16。現在、京都民芸資料館の2階室に残る棟札によっても確認することができる。

13）上田前掲10）pp.19-20。

14）前掲12）棟札及び「京都民芸資料館の概要」『京都民芸だより』第18号（京都民藝協会、1981年7月）pp.6-8。

15）西邨辰三郎は、収蔵庫としての「京都民芸資料館」を一里塚として将来的に本格的な「京都民芸館（仮称）」の実現を願う旨を記している。前掲2）pp.235-236。

16）前掲14）pp.6-8に基づく。

17）田中氏所蔵の工事写真帳から確認することができる。

18）石川祐一「第1節　第二世代の展開－上田恒次の建築作品－」『近代日本における民家の評価に関する研究』（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士論文、2008年9月）pp.47-54。石川祐一「上田恒次の建築作品」『住宅建築』No.463（建築資料研究社、2017年6月号）p.89。

19）前掲7）石川「松乃鰻寮　旧松野邸」『民芸運動と建築』pp.100-104など。

20）上田恒次のご息女・奥平比佐子氏からの聞取りによる。

（図版出典）

図1～図5：上田恒次家所蔵資料

図6～7、9～23：田中重太郎氏所蔵資料

図8：「京都民芸資料館の概要」『京都民芸だより』第18号より

写真1、6～7、11～12：著者撮影

写真2～5、8～10：田中重太郎氏所蔵資料

＊資料撮影はいずれも著者による。

（謝辞）

本稿の執筆にあたり、資料を提供頂いた奥平比佐子氏、田中重太郎氏をはじめ、京都民藝協会の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。